

# 弔辞の談話構造とコミュニケーションスタイル

利岡真帆(神戸大学)

## 1. はじめに

スピーチには大きく分けて二つのコミュニケーションスタイルが存在する。一つは、これまで多くの研究がなされてきた政治演説やスピーチ大会のような一対多のコミュニケーションスタイルである。もう一つは、結婚式の祝辞や葬儀の弔辞(以下「慶弔スピーチ」)のように「主役」となる人物(新郎新婦, 故人)と、「参列者」が存在するスピーチである。このタイプのスピーチでは、主役を直接的な受け手とし、参列者を傍参与者とするコミュニケーションスタイルが成立する(岡本他(2008)は漫才対話を用いてこのタイプを「オープンコミュニケーション」と名付けている)。しかし、慶弔スピーチでは主役だけでなく参列者に向けて語ることもあり、二つのコミュニケーションスタイルが混在している(本研究ではこれを「切り換え型コミュニケーションスタイル」と呼ぶ)。そこで、本研究ではスピーチの一種である弔辞を用い、その談話構造とコミュニケーションスタイルを明らかにする。また、それらを用いて組織の代表や友人代表といった話し手の立場による比較を試みる。

## 2. 弔辞資料の定義と収集方法

弔辞とは、『日本国語大辞典第二版』によると弔詞に同じと記載されており、弔詞には「死者をとむらう時にのべることば。くやみの気持ちを述べることば。また、その文章や詩歌。」と記載されている。しかし、これでは範囲が広すぎるため、本研究における弔辞の定義は「葬儀などの弔いの場面においてプログラムに組み込まれた悔やみのスピーチ」とする。

弔辞は主に次の4つの形で公刊されている。①弔辞の文例集に実例として掲載されたもの。②故人の追悼録に掲載されたもの。③故人の所属する機関(学会等)の機関誌等に掲載されたもの。④芸能人などの弔辞を集めた弔辞集に掲載されたもの。本研究で用いる弔辞は、このような公刊された資料より収集したため、公的な立場の人に対する弔辞が多い。しかし、弔辞自体が主に公的な立場の人に対して読まれるものであるため、弔辞の全体像をつかむことができると考える。

## 3. 弔辞談話の分析方法

### 3.1 弔辞談話の構造

まず、弔辞談話の基本構造を表1のように整理する。

表1 弔辞談話の基本構造

構造	内容
[導入部]	〈挨拶〉
[主題部]	〈死の説明〉 〈心情説明〉 〈人柄〉 〈経歴〉 〈功績〉 〈思い出〉 〈今後の決意〉
[結び部]	〈挨拶〉 〈祈り〉

弔辞の談話構造は式辞スピーチを分析した深澤・ヒルマン小林(2012)を参考に「導入部」「主題部」「結び部」の三段階でとらえ、[ ]で示す。また、書きことばの分析で用いられる「文段」や会話分析で用いられる「話段」のように内容ごとに弔辞を区分し、〈 〉で示す。例1がその分析例である。弔辞ごとに内容が異なることもあるが、基本的には例1のような内容、構造で語られることが多い。

例1)

[導入部] 故能勢朝次君の霊前に謹んで申し上げます。 〈挨拶〉

[主題部] 君は中世国文学特に能楽の研究に専念せられ帝国学士院恩賜賞を受けられた「能楽源流考」を始め(略)多数の著作を発表せられる斯界の権威として活躍せられ(略) 我国の伝統芸能の保護行政に御尽力を煩

らわして参ったのでありますが、〈功績〉  
 今度突然君の訃に接し当委員会として誠に痛恨に堪へないばかりでなく斯道の為に痛惜の極みであります。〈心情説明〉

[結び部] 本日茲に告別の儀が営まるるに当り君の多大の功績を偲ぶと共に〈挨拶〉  
 心から君の御冥福を御祈りして私の弔詞とします。〈祈り〉

[導入部] では「これから弔辞を述べる」といった慣用的な〈挨拶〉が語られるが、弔辞によっては省略されることもある。[主題部] では、〈死の説明〉(死因や亡くなったことの確認など)、〈人柄〉(経歴)〈功績〉〈思い出〉など故人がどのような人物であったかについての説明や、残された人たちが今後どうしていくのかといった〈今後の決意〉が語られることもある。なお、故人が亡くなったことへの驚きや悲しみを述べる〈心情説明〉に関しては[主題部]だけでなくどの位置でも語られるものである。[結び部] では冥福や安息の〈祈り〉やこれで弔辞を終わるといった意味の形式的な〈挨拶〉が語られる。

### 3.2 弔辞談話の発話意図とコミュニケーションスタイル

#### 3.2.1 発話意図の分類

談話の発話意図や機能の研究にはさまざまなものがあるが、本研究ではK. ビューラー (Bühler) の3機能説(表出・訴え・演述)を用い、発話がどのような意図をもって語られているかを分析する。

佐久間(1941)によると、《表出》は話し手の自身の感情など内的事象の言語音声化したものである。《訴え》は相手の反応を引き出すことを意図したもので、「呼びかけ」「依頼」「禁止」も含まれる。《演述》は外界の内容事物について伝える情報伝達のはたらきのことである。なお、発話意図に関する単位は熊谷・篠崎(2006)の機能的要素(相手に対する働きかけの機能を担う最小部分と考えられる単位)を用いる。以下が分析例である。

例2) 山田さん《訴え》, わたくしは今あなたのみたまの前に、弔辞を申し述べることは甚だ残念に思います。《表出》

例3) 先生は、旧制の福岡高等学校から東京大学法学部に進まれ、(略) 神奈川大学に赴任されました《演述》

#### 3.2.2 スピーチのコミュニケーションスタイル

1. でも述べた通り、スピーチには大きく分けて二つのコミュニケーションスタイルが存在し、それを図式化したものが次の図1・2である。まず、図1は政治演説やスピーチ大会、講義などの一対多のコミュニケーションスタイルをとるものである。図2は慶弔スピーチのように「主役」となる人物と、「参列者」が存在する場合のスピーチである。このタイプのスピーチでは、主役を直接的な受け手とし、参列者を傍参列者とするコミュニケーションスタイルが成立する(岡本他(2008)はこのタイプを「オープンコミュニケーション」と名付けている)。

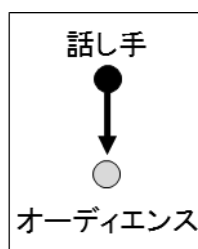


図1 一対多のコミュニケーションスタイル (タイプI)

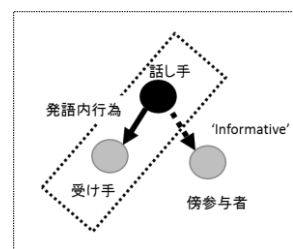


図2 オープンコミュニケーションスタイル (タイプII)

岡本(2018) 図3「発話の内部志向性と外部志向性」より作成

慶弔スピーチも受け手(主役(新郎新婦・故人))に向けて語られているものを傍参与者(参列者)に聞かせるという図2のようなコミュニケーションスタイルをとることがある。しかし、詳しく分析すると主役だけでなく参列者へ向けて語ることもあり、図1と図2が混在する。その混在をどちらに比重があるかで分類したものが図3のa~eである。なお、a~eのタイプは発話意図と関連するため、図3ではそれぞれのタイプごとに弔辞談話を例にした発話意図を示す。図の実戦矢印は直接的な受け手を表し、点線矢印は間接的な受け手を表す。また、主役とは弔辞においては故人のことである。不等号は直接受け手の向きを示したものである。なお、分析の際には直接受け手の向きを発話意図ごとに分類し【 】で示す(発話意図の分類は《 》で示す)。



図3 慶弔スピーチの切り換え型コミュニケーションスタイル（タイプⅢ）と弔辞談話を例にした発話意図

#### 4. 話し手の立場による弔辞談話の分析

分析する弔辞は組織の代表者、友人、またその両者を含む立場という 3 つの異なる立場で読まれた弔辞である。次の表 2 はそれぞれの弔辞の談話構造と発話意図、タイプⅢの a～e の分類を示したものである。なお、【 】内の故人、参列者は省略している。

表2 話し手の立場による弔辞比較

構造	組織の代表		友人		組織の代表かつ同僚	
	挨拶	表出【<】d	挨拶	表出【=】c	挨拶	表出【>】b
主題部	功績	演述【<】d	心情説明	訴え【>>】a	心情説明	訴え【>>】a
	心情説明	演述【<】d		表出【=】c		表出【>】b
		今後について	表出【=】c	晩年の様子	訴え【>>】a	表出【=】c
					演述【>】b	思い出
				表出【=】c	思い出	訴え【>>】a
				表出【=】c	人柄	演述【>】b
				訴え【>>】a	着任の経緯	演述【<】d
				表出【=】c	功績	演述【<】d
演述【<】d				人柄	演述【<】d	
訴え【>>】a					表出【=】c	
結び部	挨拶	表出【<】d	挨拶	表出【=】c	祈り	訴え【>>】a
	祈り	表出【>】b	祈り	訴え【>>】a		表出【>】b
						訴え【>>】a
						表出【>】b

まず、組織の代表からの弔辞は現学会会長から学会創立時のメンバーである故人に対しての弔辞である。この弔辞は《訴え》が使用されておらず、故人に関する情報（《演述》）やそれに対する話し手の感情や意見（《表出》）だけを語ったものである。また、最後の〈祈り〉でしか故人を受け手とするものがなく、全体的に参列者を意識した弔辞であることが分かる。談話の構造をみると、導入部の〈挨拶〉や結び部の〈挨拶〉がしっかりと語られており、形式的な展開の型を使用していることが分かる。

次に友人からの弔辞は研究者仲間からの弔辞である。この弔辞は導入部の〈挨拶〉が無く、故人へ呼びかける《訴え》から始まっている。〈晩年の様子〉では、例4のように終助詞「ね」を使い相手に対する確認や同意要求をする《訴え》の発話がみられた。

例4) でも、それは瓜生さんには決して思いがけないことではなかったのですね。《訴え》【故>参】

しかし、ここは晩年の様子を参列者に対して説明するところである。このような箇所では終助詞「ね」を使うのは、故人に対して語りかけているように演出する演出効果を狙ったものだと考えられる。なお、この終助詞「ね」は〈心情説明〉や〈思い出〉でもみられる。また、〈終了挨拶〉でも呼びかけや挨拶、要求などの《訴え》が用いられており、多くの段で《訴え》が使用されている。以上のように友人からの弔辞では故人への《訴え》が随所にみられ、弔辞全体が故人に向けて語られている。また、代表者からの弔辞とは異なり、〈思い出〉や〈人柄〉という故人を良く知る人物でしか語ることでできない内容が語られている。

組織の代表かつ同僚からの弔辞は、故人が最後に所属していた大学の同僚からの弔辞であるが、同大学からは他に読まれておらず、実質的には所属大学の代表という位置づけでもあった。そのため、〈心情説明〉や〈思い出〉では《訴え》が使用されており友人（同僚）としての弔辞の特徴がみられる。しかし、〈着任の経緯〉〈功績〉〈人柄〉では故人の情報について参列者に説明する《演述》が使用されており、組織の代表としての特徴もみられ、組織の代表かつ同僚という複雑な立場を両者の特徴を使用することにより上手く表していると言えよう。

## 5. おわりに

本研究では、弔辞談話を資料とし、談話構造や内容、発話意図、コミュニケーションスタイルの分析を行った。特にコミュニケーションスタイルに関してはスピーチ中に受け手を切り替えるというコミュニケーションスタイルについて言及した。これは弔辞だけでなく漫才対話など傍参加者が存在するものであれば起こり得るコミュニケーションスタイルであり、今後さらに調査する必要がある。

また、本研究では立場による比較分析も試みた。その結果、次のようなことが分かった。

組織の代表からの弔辞は、〈経歴〉〈功績〉などがメインで語られ、《演述》が多く使われており、コミュニケーションスタイルとしては参列者に対して語られているタイプⅢdが多い。また、談話構造は導入部の〈挨拶〉が省略されておらず、形式的な展開の型を用いている。それに対し友人（同僚）からの弔辞は〈思い出〉〈人柄〉など、親しい人にしか分からない内容が語られ、終助詞「ね」を用いるなど《訴え》の発話意図が多く見られる。そのためコミュニケーションスタイルも故人に対して語られるタイプⅢa・bに偏っている。

以上のように、立場によって語られる内容や主な受け手が異なっていた。これは、それぞれの立場から故人を語ることによって故人の人物像を全員で作りに上げているからだと思われる。弔辞資料には話し手の立場の違いだけでなく、故人の属性の違いや言語の違いなど比較することがたくさんあるため、今後はそれらについても検証していきたい。

## 参考文献

- 岡本雅史・大庭真人・榎本美香・飯田仁(2008). 対話型教示エージェントモデル構築に向けた漫才対話のマルチモーダル分析 知能と情報, 20-4
- 岡本雅史(2018). 聞き手行動が孕む二重の他者指向性 村田和代(編) 聞き手行動のコミュニケーション学 ひつじ書房
- 熊谷智子・篠崎晃一(2006). 依頼場面での働きかけ方における世代差・地域差 国立国語研究所(著) 言語行動における「配慮」の諸相 くろしお出版
- 佐久間鼎(1941). 日本語の特質 育英書院
- 深澤のぞみ・ヒルマン小林恭子(2012). 日本語式辞スピーチの構成要素と展開パターン—日本語パブリックスピーキングの一ジャンルの特徴として— 専門日本語教育研究, 14
- 小学館国語辞典編集部(編)(2000-02). 日本国語大辞典第二版 小学館